

申請者: 藤原 雅俊

論文題目 生産技術の事業間転用に夜事業内技術転換

審査員 武石 彰
米倉誠一郎
軽部 大

本論文は、多角化企業が、ある事業分野で蓄積された生産技術を転用することで他の事業分野での技術転換をなしとげていくメカニズムを解明しようとするものである。セイコーエプソンのプリンター事業とディスプレイ事業、そして花王の合成洗剤事業に置ける技術転換の事例を題材とし、それぞれ時計事業、プリンター事業、トナー事業の生産技術が転用されていった課程を分析している。

本論文の貢献は大きく三つある。第一に、多角化企業の限界が指摘される中で、特定の事業分野における技術転換にとって多角化企業であることの価値を考えるという問題設定は貴重である。これまでイノベーション研究は特定事業内での問題に焦点を当てて、そして多角化企業研究は資源の事業間共有に焦点をあてて分析を進めてきた。本論文は、多角化企業の技術転換(イノベーション)メカニズムという、従来の研究の死角となっていた主題を見出したという点で評価される。第二に、インタビューや文献情報などをベースに、各事例における転用と転換の課程を丹念にわかりやすく描いている。その記述は明晰である。第三に、事業間転用における事業内転換のメカニズムに関する独自の仮説を提示している。暗黙知的な生産技術を他の事業部から転用することでえられる間接的な波及効果(同一企業内であるが故の心理的刺激など)と事業間の転用を可能にする情報仲介装置(濃密な人的相互作用など)が重要な役割を果たしており、さらにこうした転用・転換の背後で技術の「転用・突出・深耕」が進み、これが多角化企業の長期成長を可能にしている、という仮説を提示している。事例の背後で作用していると思われるメカニズムを深く考えていく作業を重ね、イノベーションめぐる多角化企業の積極的意義を分析・考慮した本論は、関連分野の研究者にとっても、そして多くの多角化企業にとっても、示唆に富むものである。

本論文にはいくつかの問題点もある。多くの多角化企業が低迷している要因と考えられる組織内の調整コストの高さをどの様にすれば克服できるのか。あるいは、専門型企業が外部から知識を導入するイノベーション・プロセスと比較して多角化企業にどのような利点があるのか。そのためのメカニズムであるとする情報仲介装置や間接的な波及効果などは、より一般的にはどのような組織現象としてとらえることができるのか。こうした問題に対する検討はまだ充分とはいえないところがある。それは、本論の分析の枠組みにおいて、多角化企業、イノベーション、あるいは組織に関する既存研究の蓄積との結びつきがやや弱いことが背景にあるかもしれない。しかし、本論文はこうした問題点を補ってあまりある優れた内容を持っている。問題点については今後の研究課題として取り組んでいくことを筆者に期待したい。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位をうけるに値するものと判断する。